

古典『書』の学びを現代書へ

～甲骨文を素材に新たな書表現を試みる～

平嶋 一臣

From Study of Classical“Syo” to Modern “Syo”

～Make Challenge New “Syo” Style from KOUKOTSUBUN～

by Kazuomi HIRASHIMA

はじめに

書を学ぶ者にとって、常に意識している語に、「汲古創新」「求古創新」「温故知新」がある。もっとも、これは、書の世界に限ったことではないのかもしれない。模写・臨画・模刻もまた学習の一過程と位置づける絵画・工芸・彫刻などの世界においても、同じ事が言えるだろう⁽¹⁾。

それでも、書学⁽²⁾の世界において、殊にこの意識は付きまとう。書の世界は、基本的な学びのスタイルとして、「臨書」⁽³⁾というものが、初心者から書歴の長い者まで、休むことなく付いてくるからだ。

自己流で目標を失い始めた書学者にとって、「古きを汲み取る」「古きを求める」「故きを温ねる」学習スタイルは欠かせない。「臨書」で付けた力を土台にして、日々精進の自己改革とも言える「創新・知新」（新時代に相応しい作品創り）が要求されるのである⁽⁴⁾。

私が筆を初めて手にしたのは小学校四年生の時であるが、この古典「臨書」という学び方が在るのを知ったのは高校に入ってからのことだ。古典の原帖を直接自分の目で見つめ、そこに在る筆法や造形美を掴み取るという学び方を知った。確か、その時私に初めて与えられた古典は、『九成宮醴泉銘』⁽⁵⁾であった。私にとって、「臨書」の難しさの中に、ある種の魅力を感じ、のめり込んでいった最初であった。その後、書学途次でのさまざまな迷いや葛藤の時期を経て、今日まで曲がりなりに60年が経過した。

そんな私に、書を比較的、絵画的な鑑賞法で眺める傾向が現れ始めたのはいつのことだったろう。中でも、絵画的な造形美（デザイン性）の視点から『甲骨文』⁽⁶⁾に興味を持った。

やがて、社会人となりさまざまな古典『書』に手を染めながらも、基本的には私流を崩さず伸び伸びと創作を続けてくることが出来たのも、その土台に『甲骨文』や『木簡』のような、古代人の明るく大らかな書線がベースにあるのだろう。

本論は、その古典中の古典といわれる『甲骨文』の学びを、現代書に発展させる手だてについてまとめたものである。

受理日：平成 29 年 11 月 30 日

純真短期大学こども学科特任教授 福岡県幼児教育アドバイザー

1 序論

甲骨文が発見され、約 120 年が過ぎた⁽⁷⁾。『甲骨文』は、制作されてから 3000 年以上を経た後確認された古典中の古典だ。長い年月、地中深く眠っていた歴史的経過からも、成立期の文字の形を今に伝えているこの古典書は看過できないものがある。

かといって、これを自分の学書歴に直ちに採り入れようとする者が多いわけではない。それは、この古典が後の漢時代以後に見られる文字のように、筆を使って書き遺したモノではないからであろう⁽⁸⁾。その理由もあってか、『甲骨文』に惹かれる書家の多くは、その造形性と言おうか古代人生来のデザイン力に注目するようである。前述のように。書を絵画的な視点から眺める傾向のある私もその中の一人である。『甲骨文』の本物を、一度は眺めてみたいと思っていた。

その出会いは偶然に訪れた。同じく書道史上の古典・『木簡』という漢の時代に書かれた実物を見たくて大英博物館に赴いた時のことだ。東洋資料コーナーの陳列ケースの片隅に、木簡と並びひっそりと置かれている『甲骨文』を見ることができたのである。1978 年 8 月のことである。

よく見ると、そこには象形文字らしきが 20~30 字ほど彫られていた⁽⁹⁾。世界最古の漢字の解読文も展示板に書かれていたのだが、当時はさほど興味も持たなかった私は、これらの文字群をメモしていない。今となっては口惜しい限りである。

この時の対面から 39 年が過ぎた。その間、書作品創りを重ねていくにつれ、次第に文字の造形性やデザイン性に惹かれ始めた私は、時折、これを素材に作品化するようになっていた。

当然のことであるが、このような絵画的造形性の濃い書跡を、筆で表現する専門家は少ない。したがって、私の臨書歴でもこれだけは独学でやらざるを得なかった。いや、独学の世界だからこそ私流を存分に出せたのだろう。そういうこともあり、私のような独立志向の強い人間が、今日までこの古典に浸ることが出来ているのかもしれない。

そんな私が、ある日ある時ふと閃いたことが、(この古代文字、特に象形文字を習字や書学の導入学習に取り入れることができないだろうか?) ということだった。

3000~3500 年前の文字は、現代人の感覚からすれば、文字・漢字というよりむしろ絵に近い。それだけに幼児・児童・外国人の『書表現』『書写』『書道体験導入』時に興味を持たせる方法として、効果が期待できるのではないだろうかと考えた。

本論検証のために、以下に挙げる個々の実践は、甲骨文の学習や作品化の試みが、書学者の書への興味を惹起させる方法になり得るといふ仮説に立ち、試行錯誤を繰り返してきた結果と経過である。

そこでは、亀の甲羅や牛・馬・鹿の肩胛骨に刻んだ古代文字を、そのまま拡大して現代の書表現を行ったり、書に親しみを持たせる話題作りに使ったりと、実験的な取り組みを行ってきている。また、大学の書道部員には、臨書した学びを基に、どのような現代書表現があるか、という試みもさせてきた。

子どもたちや大学生の甲骨文に寄せる思いを交えながら、古代文字の持つ人間性溢れる天衣無縫な美的センスを紹介していくとともに、そこに潜むモダンさに迫りたい。

○研究の目的

仮説

甲骨文の教材化や作品化の試みは、書学者の書への興味を惹起させる方法になりうる

仮説を検証するために、本論の展開を次の4項に分ける。

① 書道史における甲骨文の位置

現存する世界最古の一つである。書の世界では、未だメジャーとは言えない古典書・甲骨文に光を当て、その明るさと屈託のないロマンの世界を紹介する。それとともに、これを学ぶ幼・小・中学生には、文字学習や漢字学習に興味を持つきっかけ作りにしたい。甲骨文に見られる文字群は、元来動物の甲羅や骨にナイフで刻んだ文字であり筆跡ではない。したがって、臨書自体があり得ないという考えもあろう。しかし、その文字性・造形性という意味では、書学の対象分野と考えて差し支えない。刻字されたものを敢えて筆で表現するところに、さまざまな解釈と新たな挑戦（試み）が生まれてくる余地を十分に残している。

② 甲骨文の現代性について

ここでは甲骨文の価値を検証したい。人間にとって「価値」「価値観」は千差万別である。それだけに、まず感じたままの心情を尊重し、その集約である対象の作品化（ここでは象形文字）という価値が浮かび上がってくるものとする。本学学生が、「甲骨文」にどのような価値を見出すのか、ナマの声を中心に検証していきたい。

③ 甲骨文のデザイン性を発展させる試み（出前授業を中心に）

甲骨文の中に見られる古代人の豊かな発想を幼児・児童・生徒・学生（外国人留学生を含む）に実際に筆を持って体得してもらおう。この出前授業の中から生まれる子どもや学生のつぶやきを拾い上げ、書に親しみをもち始める姿を明らかにしていく。

④ 甲骨文を現代書に創作する

甲骨文を素材として、これまでに私が発表してきた作品を、解説を交えながら紹介する。

以上、4つの視点から甲骨文の分析および発展的学習方法を紹介しつつ、書道史上、見過ごされがちな殷・周時代の彫り師達が遺した「甲骨文」が、今再び現代人へモダンな造形性とデザイン力として訴えかけてくるその本質に迫りたい。

2 本論

（1）書道史における甲骨文の位置

漢字の歴史的変遷を知る上で、甲骨文は貴重な資料である。それは、世界史上に知られるエジプトのヒエログリフ・地中海のフェニキア文字・メソポタミアの楔形文字も在るが、中国の甲骨文字という古代文字の持つ特徴は、今日尚その原型の一部を留めつつ

現代人である我々が使用している文字ということにある。つまり、甲骨文の中には、現代人の我々が容易に推測を加えながら読むことが可能な文字が、今以て残っているわけで、これは、上記の他の文明圏には無いことである。

長い歴史の中で、書きやすさを求め、変形・組み合わせなどを経て、今もほぼそのままの形態・造形を以て判読可能な正編がおよそ 1720 字、かなりその形態を変えており簡単には判読が難しいいわゆる異体字がおよそ 3000 字と言われている⁽¹¹⁾。いずれにしても、今尚生き続け、当時の息吹を今に感じ取ることが出来る。甲骨文の持つ生命力には目を見張るものがある。

そのような現状にあって、甲骨文が基本的に象形文字を主体として出来上がっているところから、これをデザイン的に見る現代人にとって、かなりの造形的なロマンを秘めて今日まで映り続けてきている。この長所を生かしつつ、さまざまな場面で今なお活用可能な文字群となっていることを断言して良いであろう。また、このような書体であるだけに、幼児期、遊びながらの学び、小学校の漢字学習への興味づけなど、として活用する方法も考えられる。さらに、書の学習を学ぶ学生達に造形美を追求する手だてとして、これを臨書学習として採り入れるなど、多方面の試みにこれを使っていくことも可能である。

(2) 甲骨文の現代性について(学生の気付きアンケートから)

私は現在、純真学園大学で『国語表現法』、純真短期大学で『文章表現法』を担当している。その折「漢字や文字の由来」について、学生に問いかけることがある。ある日の授業のこと。右のような字を黒板に大きく書いた。



学生に「何と読みますか?」と問うと、異口同音「ぞう」と読む。「えッ、そう?」「これ、ゾウじゃないよ」と言い張る私を、学生は怪訝そうな顔で見つめる。この時点では、そう主張する私の理由に気付いている者は、まずいない。そこでやおら私は次のカードを見せる。

「これは何と読みますか? 3500 年前に書いていた古代象形文字です。こうこつぶんと言われるものです」学生は直ちに「ゾウ」と読みます。私はすかさず「当たり! ゾウです。この絵のような文字が、長い歴史を経て今日我々が書いている『象』という漢字になりました。さあそこでもう一度尋ねます。この字(始めに提示した黒板の字)は、どこか間違っていないですか?」それでも、学生は



なかなか気づかない。ぽつりぽつり教室のあちこちからつぶやきが聞こえ始める。「一画目が違うんじゃない???」「**そのとおりです! 気が付いたようですね。そこが間違っているんです!**」と私は返す。ここからは私の解説が始まる。と言うより先に、教室のあちこちから、学生が先に「あの一画目はゾウの鼻なんだ。だから目よりも先まで伸ばして書かないと・・・」と、必ず呟きが出る。

私はここで、この長い漢字文化の歴史の中で、現代人でも読むことが可能な漢字文化を補足しながら語り始める。同じく古代文字として知られるエジプト文字や楔形文字が、

今日では読めない使えない文字になってしまったことも付け加えながら……。再度黒板に向かい、右のような正しい「象」の字に書き改めながら、「漢字には、このように長い歴史が息づいていること、この東アジアの文字文化を意識しながら今後も丁寧に学んでいってほしい」と付け加える。学生にとっては5分間ほどの閑話休題のひとつときである。



他の文字も使い、このような経験を幾度となく行ってきた私が、ふと思ったことに（一体、学生はどれくらい漢字にストーリー性を感じているのだろうか？）ということがある。そこで、日を改め次のような資料を準備・提示し、学生の反応を確かめてみた。

学生に提示した資料は次の6点で、いずれも甲骨文関係資料である。

Aは亀甲文、**B・C**は獣骨文、**D**は**C**の部分拡大写真、**E**と**F**は比較的現代人にも解読できそうな甲骨文字を自作した一覧である。



A

(Wikimedia:CC by-BabelStone)



B

(Wikimedia:CC by-Dragonbones)



C



D



E



F

「これらを見て、あなたの気づきや発見・考えたこと・疑問に思ったことなど何でも書いて下さい」と学生に尋ねた。学生たちの感想メモは次のとおりであった（一部の学生のみ掲載）。カギ括弧・ゴシック体の部分は、学生が付けたタイトル名である。

- 『**光**』に込められたロマン』・・・この甲骨文字を見て、昔の人は文字が無いから絵なら伝わるだろうという発想が面白いと感じた。中でも、私は「光」という絵文字がとても好きです。理由は、上部が王様の冠みたいで、大衆の前に立っている王様が輝いて見えるからです。(A子)
- 『**昔からそのまま**』・・・昔の人が考案した字が、少しずつ形を変え、今こうして使われていることが素晴らしいことに思えた。私たちが昔の人の思いを引き継いでいるようだ。このようにして現代人が昔の人の考えを知ることは興味深い。今も昔の人の考えが生きているようだ。もっと他の古代文字を知りたくなった。(B子)
- 『**私が見る古代文字**』・・・私は、この中でも『雲』が好きだ。まるで絵そのものだ。この雲は、台風が迫っている時の静かな空に浮かんでいるように見える。雲だけでも季節を感じることができる。古代文字を見ていると、昔の人がどんな目線で雲を見て文字化していったのかが感じられて楽しい。(C子)
- 『**発想の力**』・・・古代文字を見ていて、『亀』や『鳥』は、今もそのままだと感じた。私が特に印象に残るのは『星』だ。下に『土』その上に『山』その上に観覧車のような円が3つあり、一つの文字の中に物語を感じた。将来、この文字を使って子どもたちが用に画用紙に描いて遊ぶことを考えた。(D子)
- 『**踊る楽しさ**』・・・『楽』という字が面白い。昔の人は、手に何かを持って踊ることが、とても楽しいと感じていたのだろう。この文字は、穀物がたくさん実ったお祝いに宴を開いて踊っているようだ。我々の時代も楽しいとすぐに踊り出すが、昔の人も同じのようだ。今も昔も共通のロマンを感じる。(E子)
- 『**甲骨文字の面白さ**』・・・甲骨文字が有るということは知っていたが、深く学んだことは無かった。今回、文字の成り立ちを知ることで、もっと多くの文字の由来を知りたいと思うようになった。子どもたちに漢字を教える際に、甲骨文字の話も交えながら教えると、漢字に興味・関心を持って学んでくれるのではないかと考える。(F子)
- 『**遊**』・・・私が気になった甲骨文字は『遊』だ。この字をじっと見ていると、一人の子どもに遊具が見える。それを使って子どもが楽しく遊んでいる。子どもは両手を挙げてバンザイをしているようだ。自分の子ども時代を思い出す。(F子)
- 『**もっと調べたい**』・・・大昔の文字だけど、なんとなく読めるものがあるのが面白。中でも、動物の象形文字は比較的分かり易い。中にはとても幻想的なものもあり、将来子どもたちに教えられそう。このプリントに書かれていない古代文字についても興味があるので、もっと調べてみたい。(G子)
- 『**父という字の由来を知って**』・・・これまで『父』の漢字の成り立ちなどあまり考えたことはなかった。『父』という字が、元々ハンマーを持って力仕事をしている人間の姿に由来するとは考えてもみなかった。漢字の由来は面白い。僕たちが日頃使っている文字の歴史を確かめるのも面白そう。(H男)
- 『**甲骨文字を使って**』・・・私は漢字の勉強が苦手でした。しかし、甲骨文字は面白いと思います。それは、漢字がこんな風にして出来ている事に気づいたからです。『鳥』や『魚』などは、そのままの姿なのですぐに読めました。子どもたちに教える時は、甲骨文字と一緒に教えると漢字を覚えるのが楽しくなると思います。(I子)

- 「Mountain」・・・私は『山』という字に懐かしさを感じる。何故かというと、私の故郷・島原は山が真ん中にどっしりとそびえており、この字を見ていると一瞬でなるほどこんな文字のようだと思ったからだ。私の故郷の『山』も昔から大切に守られてきた歴史がある。(J子)
- 「人と自然から」・・・『虹』という字はとてもロマンチックだ。虹は、雨が降った後の晴れた空に起こる現象であり、自然の力の不思議さを感じる時だ。この甲骨文字の両端には人間が立っているようだ。このことから、人と自然とのつながりが感じられ、両者の共存をここでも感じる。虫編と人工の『工』の合体も考えてみれば不思議で面白い。(K子)

上記は、学生の気付きのほんの一部である。ここには、学生の甲骨文に寄せるさまざまな思いが読み取れる。その多くは、象形文字に親しみを感じ、造形性に惹かれた感想が目立つ。ここにも、甲骨文字の効果的な活用法が浮かんでくる。尚、学生のアンケート中、「象形文字を子どもたちに伝えたい・使いたい」とあるのは、将来の仕事に幼稚園教諭・保育士を目指している学生だからであろう。いずれにしても、甲骨文字の成り立ちやその造形の中に現代的なロマンを抱き始めていることが分かる。

(3) 甲骨文のデザイン性を発展させる試み（出前授業を中心に）

① 幼稚園・保育園（年長組）で甲骨文の書表現を行う

毎年、福岡市立の幼稚園3園と純真の園（保育園）の計4園に出かけていき、年長組園児を対象に「古代文字」を書かせている。

古代文字の中でも園児が親しみを持つのは象形文字のようだ。授業⁽¹⁰⁾は畏まったものではなく、4園とも「絵の字の教室」（えのじのきょうしつ）としている。園児は毎年変わらず（文字を書いている）という意識もなく、伸び伸びと感性の趣くままに力をふりしぼり大きな紙に挑む。大人たち、特に書家はこのパワフルな園児の力量こそ学ぶべきだと、つくづく考えさせる一コマである。

次の2枚の写真は、本番前の気持ちほぐしに、あらかじめ準備した「甲骨文字カード」を使ってゲームをしているところである。予想通り、幼児達はカード文字の読みをすぐに当てる。当たった子は大喜びだ。



（古代文字〈象形文字〉当てっこゲームからスタート）

ゲームが終われば、次はめいめいが書きたい絵文字（甲骨文）作品に取りかかる。



(紙いっぱい元気よく)



(『山』を爪で下書き)



(大きな『山』です)



(もうすぐ出来上がり)

②小学校における出前授業の導入で

福岡市・糸島市を中心に3年生・4年生・6年生に毎年30校・80学級ほどの学校に『書』の出前授業を行っている。3年生には『はじめの一步』、4年生には『1/2成人式・今の心を書で表現しよう』、6年生には『THE・書』という授業タイトルだ。

ここでも、本番前の児童の心をほぐすと同時に、漢字の成り立ちにも関心を持ってほしいと、オリエンテーションの時間を取り、甲骨文字当てのゲームから始めている。合わせて私の近年作の甲骨文(象形文字)作品を見てもらい、大昔の字が現代書としても表現できることを語っている。下の写真が、その作品紹介を行っているところである。



(甲骨文字による作品『龍』を説明しているところ)

(3年生児童の感想から) ※ 読み易くするために一部を漢字に修正

- 今の漢字がどうやってできたのか、考えたことがありませんでした。先生がくわしく教えてくれたので楽しかったです (A子)
- 僕はこれまで何千年前の漢字なんか考えたことがありませんでした。今日聞いてへーそうなんだと思いました。また聞きたいです (B男)
- 今日の勉強で特に楽しかったのは、漢字がどうやってできたのかというお話です。「虹」を昔の中国の人たちは、七色の虫が飛んでいるところから作ったということも初めて知りました (C男)
- 先生が始めのオリエンテーションでしてくださった「漢字の書き方」では意外なものがあったて驚きました。もっと聞きたかったです (D子)
- 漢字クイズが面白かったです。漢字にはできた時からいろいろな意味があることが分かりました (E子)
- 一時間目の「漢字クイズ」がとても面白かったです。特に『馬』という漢字の書き方はびっくりしました。『象』の字もこれまで間違っていたのでこれからは気を付けます (F子)

出前授業の終了後、全児童からこのような感想を綴った丁寧なお礼状が届く。いつも微笑ましく読ませてもらっている。オリエンテーションの中での「漢字クイズ」の時間はわずか 10 分程度しか取っていないのだが、漢字の成り立ちに関心を持った子がいることは、何よりも嬉しい。

③国際交流での試み (東区の小学校とニュージーランドの学校との交流学習)

東区のある小学校は、2002 年からニュージーランド・サマーヴィル校と姉妹校となり、今日まで交流を続けている。この年は、ニュージーランドから福岡に訪れる年で、校長先生から私に『THE・書』の依頼があった。ところが、あいにく来校当日、私には大学の授業が入っていたので、応援に行けなかった。その代わりに、事前に学校に訪問し、当日の書体験の流れを姉妹校交流担当の先生方と綿密に打ち合わせた。私の代理とはいえ、先生方の張り切りようには、大変期待が持てた。数日後、交流会が終わってから、当日の報告を兼ねて下のような写真が送られてきた。



(『龍』を書いている)



(『虎』を書いている)



(『高』の出来上がり)



(自作を前に記念撮影)

ニュージーランドの子どもたちは、自作の書を大切に持って帰国したそうである。今も日本の思い出とともに、南半球の自宅に飾られていることだろう。交流で経験した漢字文化についての学びも、ずっと忘れないでほしいものである。

⑤ 本学外国人留学生への試み

国際交流が盛んになっている昨今、本学でも高校・学園大学に、年間数回は外国からの短期留学生が訪れる。2014年のこと、純真学園大学にタイ国から2名の留学生があった。外国からの訪問や留学生に「日本文化体験」ということで、私は「書・体験」指導の依頼を受けることが多い。そこで、筆を握った経験のない外国の学生に、漢字文化というものを分かり易く紹介するために、自作の甲骨文（象形文字）一覧表を準備する。これを参考に、まず私が書いて説明を加えると、漢字文化に少しずつ関心を寄せ始めていった。次の写真は、その時の活動の様子と出来上がった作品である。



(象形文字の説明)



(象形文字を集字して作品創り)



(象形文字を集字して作品創り)



(完成した作品)

⑥ 大学書道部における臨書と創作

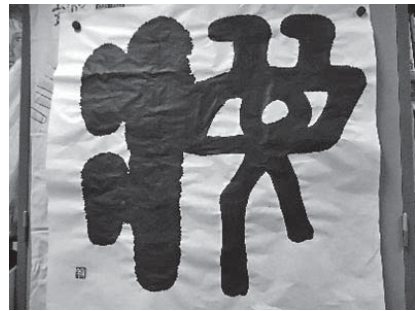
私は、本学大学・短大で書道部を担当している。今回の論文を書くにあたり、大学生はどのような臨書、およびそれを発展し創作するのか興味を持った。それを確かめるため、部員に急遽甲骨文の臨書とそれをベースにした創作を試みてもらった。テーマは、あらかじめ決めておいた『夢』である。次の写真で、原典が①、それを臨書したものが②、その臨書を発展させ創作（作品化）したものが③である。ちなみに、『夢』の甲骨文は、人間がベッドの上で横たわっている姿であり、それを 90 度右回転して亀甲や獣骨に彫っている。



①



②



③

(4) 甲骨文の現代性を創作に生かす試み（私の試み）

冒頭にも述べたとおり、書を造形的な美しさと捉える傾向が強い私は、これまでも甲骨文字をヒントに時折作品化してきた。この文字には、書家ぶった縛りが無い。それだけに自分の気持ちの赴くまま、自由奔放に筆を走らせることができる。気楽である（それだけに、調子書きに陥り線質の浅い作品となることがあるのだが、これは戒めなければならない）。次の4点は、甲骨文字を素材に現代書表現を試みた私の作品である。



『旅』



『Family』（右から母・子・子・父）



『龍』



『身』

3 結論

「甲骨文」は、今日の書道界では、あまり振り返られることがない。しかし、今回私の経験を披露してきた通り、「古代文字（甲骨文・象形文字）」は、幼・小期の筆字・漢字学習に興味を持たせるとともに、大学生にとっても漢字ロマンを抱かせるほど、素材としての価値は大きい。また魅力的でもある。

私が「甲骨文」を、今後の国語・書学習に採り入れて欲しいと願う理由は次の通りであり、これを本論の結論とする。

① 甲骨文には、その歴史上の位置づけからしても、古代人の息吹がそのまま今も伝わっている。したがって、これを学習することは、文字学習をすることともに、古代人が意思を伝達する手段として作りあげていった心の琴線に触れることにもなる。東アジアに生まれ今もなお息づいている古代文字・「甲骨文字（象形文字）」の価値を、これからの世代にも伝えていかななくてはならない。

② 「甲骨文」の造形的デザイン性は、そのまま現代人にも共通している。古いようで極めてモダンな姿を留めている。一方、これは現代人にとって、古代の人々に思いを馳せるとともに、夢とロマンを抱かせる価値が十分にある。したがって、これをもっと教育の現場で活用し、国語や書学習の中に位置づけるべきである。また、ここでの学びをさらに発展させるなど、甲骨文字を創作学習に大いに採り入れ、幼児期・児童期の学びに興味を持たせる素材として、さらに活用すべきである。

おわりに

「書道」よりも「書アート」的な傾向にある私は、やはり造形性の強い漢時代の「木簡」や、さらに時代を遡った殷の「甲骨文」に惹かれる。

これからも『書』が生きぬいていくため、海外でも理解してもらうため、「道を究める」書道的な考え方もあるだろうが、私としては造形美の視点で、筆と墨と紙の存在意義を見出していきたい。そんな私は、書が芸術と呼ばれることに、今も躊躇している。いっそ「書アート」ならば、この迷いや疑問に容易く説明がつく。

本論は、「甲骨文」のモダンさを一つの価値として、学校現場に位置づける方法を具体的に提示した。「書」の学習法について、今回の提示はいずれも私流の授業法であり、一つの実験的方法と捉えていただきたい。さらにアレンジを加えつつ、甲骨文が児童・生徒・学生達にとって、今後さらに漢字（文字）学習への意欲づけに繋がっていくことを、何よりも願っている。

「美学」論にまで話を進めるには至らなかったが、いつの日かこれをテーマとして、「書の美学」「書は芸術と呼べるか」「書・第二芸術論」⁽¹²⁾にまで言及していきたいと考えている。

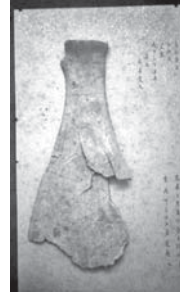
註

- (1) 絵画や彫刻の世界にも、その学習過程において、名画を模写・模刻することで、自分の目指す作家がどのような手法を駆使していたのかを、学び取る方法が有ると聞く。これは、書学者における「臨書」にあたるのではないかと考える
- (2) ここでは、単に「書を学ぶ」という意味で使っている。したがって、後述の「書学歴」は「書を学んできた経験・経過」の意。「書道」「書道歴」と言うと、私にはどうしても「道」が気になる。「道」を求めて「書」を学んできたのだろうか、と考えるからである。日常会話や論文中、やむを得ず「書道」の語を使うことはある。したがって、ここでは「書学」「学書」という造語を使っている。小・中学校の『書写』学習はともかく、高等学校の芸術科・『書道』の教科名は、芸術科『書』または『書

- 学』『書の楽しみ』『書アート』とした方が芸術科の括りに馴染むと私は考える。
- (3) 「臨書」とは、書道史上の名品である原帖・原典を半紙や画仙紙に筆で写し取る学び方を言う。形をそっくりに写し取る「形臨（けいりん）」、線質を中心に作者の気持ちを掴むことに主眼を置く「意臨（いりん）」、原帖を見ずその調子や文章をよどみなく書く「背臨（はいりん）」の3つに分けるのが一般的である。
- (4) 「臨書」は不要、常に自己の感情を表現することが本物の書作態度である、と考える書団体も当然存在する。これを紛らわしくしないためにも、「書道」「習字」とは別のジャンルとして「書」または「書アート」としてはどうだろうか。
- (5) 欧陽詢（557～641）75歳の時の書。唐の太宗が九成宮に避暑に出かけた折、離宮の近くで見つかった泉を記念し揮毫した。古来より楷書中の楷書、と言われる。日本では明治44年以後、学校習字に欧風と言うこの筆法が中心的に採り入れられた。したがってこの筆使いは現在の小学校・中学校の書写の教科書にもかなりの影響をもたらしている。明治44年以前では、顔真卿風の書き方もあったのだが、この欧陽詢風が採り入れられると、日本人の気質にマッチしたのであろうか、欧風の書き方・筆運びが主流となり現在に至っている。余談ではあるが、欧風のみ教科書になって以来、左利きの児童生徒にとって、書写・書道嫌いが広まっていったと私は考えている。
- (6) 紀元前1500年頃から刻され始めた現存最古の中国文字。正式には「亀甲獣骨文」という。「卜辞」「契文」とも。いずれの文字も、亀甲や牛・馬・鹿など獣骨（主に肩胛骨）に刻まれている。甲骨文の「文」は、「文章」ではなく「文字」と解釈する。文章は主として占ト（せんぼく）の記録である。この占いは殷時代中期から既に行われていたようだが、今日大量に発見されているのは殷時代後期遺跡からのものであり、中国・日本・イギリスなどに収集されているものを総計すると10万点以上になっている。文字資料として世界最古のものの一つであり、漢字研究者にとって貴重な資料である。戦前福岡にも留学した学者・郭沫若（1892～1978）は、甲骨文字解読にも力を尽くしている。一般的に甲骨文をその歴史の変遷による書風（刻風と言うべきか？）の違いから、これを五期に分けている。前期の大ぶりの荒いタッチ（彫り方）のものから、後期にかけてはやや小さく穏やかで品良くまとまっていく傾向が見られる。私がかつて大英博物館で見たのは、その時の印象からすれば殷時代後期のものであろう。
- (7) 1899年、当時「龍骨」と呼ばれ薬用とされていた獣骨に、文字が刻まれていたことから甲骨文の研究が始まった。この出土地の比定や公的な発掘に多大な貢献をしたのは羅振玉（1866～1940）である。後に北京の南およそ470km、安陽市小屯での大量発掘による解読が進むにつれて殷墟遺跡の姿が次第に明らかになっていく。
- (8) 殷に次ぐ周・秦時代に多く見られるようになる「金文」もまた、筆字をベースにしたとは考えにくい。私はこの時代までを「筆字時代」ではなく「刻字時代」と呼んでいる。
- (9) 大英博物館の正面と当日館内で撮影した一枚の甲骨文写真



(大英博物館)



(甲骨文字)

(10) ここではやむを得ず「授業」という語を使っているが、実質は「活動」と言うべきであろう。幼児期では、遊びながら学ぶといった「墨と筆を使つての活動」といった内容である。

(11) 白川 静著『字統』P2“字源の研究について”の項より

(12) かつて、「書は芸術か?」という疑問が出され、日展から外そうという意見もあった。

参考図書

- 白川 静解説『書跡名品叢刊代 107回＝殷・甲骨文集』二玄社、1970年
- 佐野光一編『甲骨文字を書く』天来書院、2011年
- 佐野光一編『甲骨文』天来書院、2001年
- 石田千秋・松丸道雄・新井光風・牛窪梧十共著『甲骨文・金文』二玄社、1990年
- 張 大順著『甲骨文書法』木耳社、2012年
- 小林石寿著『甲骨文字精華』木耳社、1985年
- 下中邦彦編『書道全集第1巻・中国・殷、周、秦』平凡社、1965年
- 武田伊勢雄編『漢字千里眼』勢光瑠古典研究会、1971年
- 木耳社編集部『甲骨・金文名跡選』木耳社、1998年
- 張 大順著『甲骨文字千字文』木耳社、2002年
- 高橋政巳・伊東ひとみ共著『漢字の気持ち』新潮文庫、2011年
- 白川 静著『字統』平凡社、1984年
- 山田勝美著『漢字の語源』角川書店、1976年
- 加藤常賢著『漢字の起源』角川書店、1970年
- 白川 静著『漢字』岩波新書 747、1970年
- 林田 稔著『当用漢字物語（上巻）（下巻）』西日本新聞社、1960年・1961年
- 藝文印書館印行編『校正甲骨文編』台湾藝文印書館、1974年
- 城南山人著『甲骨文字書道のすすめ』日貿出版社、1984年
- マール社編集部編『古代文字で遊ぶ』マール社、2001年
- 石川九楊著『書とはどういう芸術か』中公新書 1220、1994年
- 魚住和晃著『書の十二則』NHK出版 187、2006年
- 上田桑鳩著『書の話・第一巻』教育図書研究会、1964年
- 宇野雪村著『書・造形編』教育図書研究会、1956年
- 江守賢治著『字と書の歴史』日本習字普及協会、1980年
- 春名好重編『書道基本用語詞典』中教出版株式会社、1991年